

全電源喪失の記憶

証言 福島第一原発

3

■第4章「東電の敗北」

3月14日午前11時1分、福島第一

原発3号機の原子炉建屋が爆発し、

きのこ雲のような煙が上がった。隣

の2号機タービン建屋前で復旧班電

気設備担当の松本光弘(47)が乗る

うとしていた業務車は、飛んできた

がれきでつぶされた。

「外の放射線量が高い。建屋の中

で待機してください」。近くにい

た放射線管理担当の保安班員が叫ん

でいた。

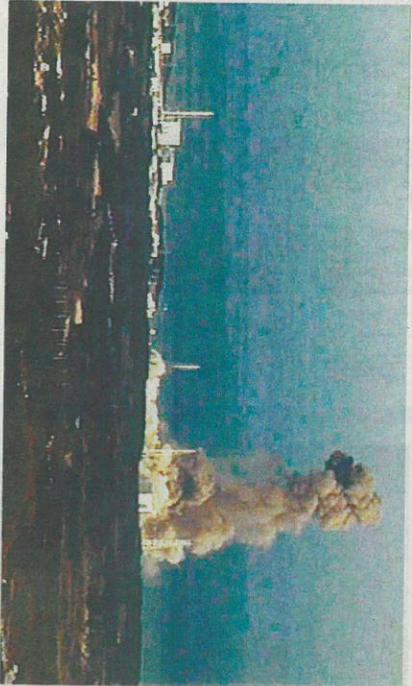
松本たちは周囲の粉じんが収まる

のを待ち、2、3号機間の構内道

路を走って避難した。路上に落ちた

建屋の壁を乗り越え、一度だけ3号

機を見上げると、建屋上部がなくな



「もう絶対行かない」

ていたのだ。

現場から戻った松本たちは全身

覚悟していた『なんて言うでしょ。

粉じんまで真っ白になっていた。松本

は「大丈夫だと言ったじゃないか」

実際に死にかけた。本当に目の前に

『死』があったんですよ」

松本たちを送り出す際「当面、大丈

夫」と言ったのは第1復旧班長の稲

垣が振返る。「彼らには余震

や原子が興奮する声も聞こえた。あ

や爆発の中、ものすごい努力をして

の爆発で生きていたなんて。生きて

た。生きてた」

周理にはまだ家族の安否が不明な

な。池田は小声で「生きて

たよ」と応じた。妻はいつまでも泣

いていた。

免震棟に戻った松本たちはもう誰

も、どんな情報も信じられなくなっ

た。「完全に戦意喪失でした。『も

う絶対行かないぞ』って」

連の作業で100ギガを超え、極ば

松本の脳裏には今でも3号機爆発

の光景が鮮明によみがえる。「免震

当時。共同通信 高橋秀樹)

松本の前方を防護服姿の作業員た
ちが何人も走っていた。全面マスク
で息苦しかつたがひたすら走った。
早くここを離れたい一心だった。
免震重要棟にたどり着くと、松本
たちを現場に送り出した復旧班の池
田(男、50)が待っていた。「生きて
た。良かった」。池田は泣いていた。
爆発が起きた時、池田は松本たち
を「死なせてしまった」と思った。
それでも「何とか無事に帰ってきて
くれ」と、折るような気持ちで待っ
た。福島中央テレビ提供)

▲の水素爆発11年3月14日(福島中央テレビ提供)

松本 池田 稲垣 光弘 高橋 秀樹